

## 行為者なき行為者性と権威性（要旨）

河島 一郎

出来事は行為と非行為とに区別されるが、その基準は何か。前者においては行為者の関与があるのに対して後者はそうではない点に注目するならば、行為と非行為の区別は行為者の関与（行為者性）の有無と重なることになる。では行為者の関与の内実は何であろうか。本発表では、行為者の関与をめぐるデイヴィドソンからブラットマンへの因果説の系譜を「行為者なき枠組み」として紹介する。

デイヴィドソンは「身体動作が直前の心的状態によってしかるべきルートで引き起こされること」という因果説の枠組みを提示した。これは、行為者を持ち出すことなく行為者性を理解するために、きわめて局所的な要素にのみ訴えるというものである（ミニマル・モデル）。しかし彼が行為の典型と見なした行為は短期的・個人的・単独の行為であり、このことがミニマル・モデルの限界でもあった。

行為が長期的・社会的な文脈において評価される際には、行為者性とは別の仕方で行為者の関与（権威性）が問われることがある。そしてミニマル・モデルに依拠するデイヴィドソンは、そうした評価については因果関係による成り行き任せに過ぎないといわざるを得なかった。すなわち行為がさまざまな文脈で他人から評価され、さらにその評価をもとに行為者自身が自己評価をし、能動的に行為に関与することで行為者のライフスタイルを形成・調整するという側面を考慮することができなかつたのである。

行為の社会的な側面に目を向け、行為者による能動的な関与を説明するためにミニマル・モデルの拡張を試みたのはブラットマンである。彼は未来志向的意図という心的状態を導入することで、行為者なき枠組みの中で長期的・社会的な行為を理解しようとした（計画理論）。そして後に行為者の関与の必要十分条件として、「自己統制的方針」という心的状態の存在を主張することになる。つまり行為を組織化する心的状態が行為者と等価であると見なされたのである。

しかし主知主義的色合いの濃いブラットマンの計画理論では、予期せざる結果によって行為が評価されるという場面が抜け落ちてしまうし、また行為者なき枠組みの中では行為や心的状態の評価ではなく行為者の人となり（personhood）が評価されるという場面や行為評価におけるコミュニケーションの役割が正当にすくい取られていないという難点がある。つまり、他者からの評価において問題となる権威性については、行為者なき枠組みでは処理しきれないのである。本発表では、最後にこうした難点についても触れ、行為の評価に関わる権威性を射程に入れた十全な枠組みを与えるためには人格としての行為者を導入せざるを得ないことを論じたい。